

公開講演会記録

中国残留そして祖国で

— 日中友好交流80年の旅路

天水会会長 橋村武司

はじめに

日中平和友好条約締結45年を迎え、新たに第一歩を踏み出した年。尊敬する周恩来元総理の生誕125周年の記念すべき年に栄誉ある講演の機会を与えていただき感謝する。紹介者の村田嘉明さん、新宅久夫さん、そして国際善隣協会の関係者および本日ご聴講して下さる方々へお礼申し上げます。

私は敗戦後、中国に残留(留用)し、成長の少・青年期を中国で過ごした。国共内戦の最中、生活は厳しく飢えも経験したが、中国の人々も同じような

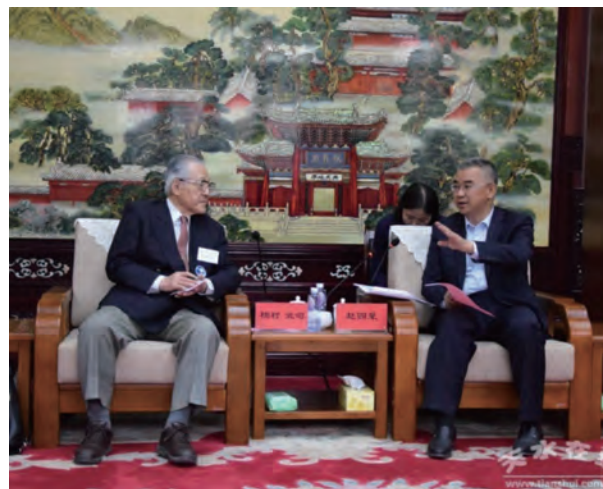
境遇だったので、苦境をくぐり抜けることができた。また学問にも飢えた。

図らずも八路軍の後方支援の仕事の機会を得て、新中国の建国のため微力ながら貢献できたことを誇りに思っている。鶴岡炭鉱では「太陽の下でなら何でもできる」との信条と自信を得た。今では中国を育ての親と思い、第二の故郷と思っている。

今日は、私が実際に体験・実践したことをお話しする。一つの事例として参考になれば幸いだ。

1. 生い立ち

私は長崎県対馬厳原で昭和7年5月22日に生を受けた。父寿太郎は当時ハイカラなクリーニング店を開いていた。話によると上京した機会に白洋舎でクリーニングの技術を習得したとのことである。母は佐賀県白石の中農が実家で、早く母を亡くしたので、5人妹弟を母親代わりに面倒を見た苦労人であった。生を受けて90年、幾多の苦境を切り抜け、頑強な体と精神力を授けてくれた母に感謝している。下の妹二人も80台後半、九州で元気に過ごしている。父は背が高く男ばかり7人兄弟の次男だったが、34歳の若さで大腸がんを患



天水副市長(右)と対談(第10次天水友好訪問)

い他界した。そして4人の弟たちも若くして肺結核で欠け、残ったのは長男と七男になった。私は、祖父にとって初孫で男児だったので、大事に育てられた。祖父は佐賀の人で日露戦争参軍の勇士、硬軟両用、葉隠れ武士の特訓と襦袢の懷に抱かれてかわいがられた。小学2年生の時、父を亡くしたが、学習参考書片手に勉強を助けてくれた。また塾にも通わされた。お陰で小学1年から4年まで級長を務めた。一方、お山の大將には勝てず孤立していた。当時は戦時下、私の将来の夢は海軍士官、恰好良さに憧れた。厳原港には掃海艇が出入りし、士官たちが洗濯物を託してくれた。取れた桜に錨のボタンは宝物であった。4年生になってからは、水泳、器械体操に進んで参加した。

父を亡くしてから、母は職人を雇い、一緒に仕事をしたが、店の経営はままならず、戦時下物資配給の時代になった。祖父の「満州のほうが安全かもしれない」とのアドバイスにより、店を畳んで満州ハルピンの満鉄社員の伯父を頼り渡満することになった。10歳の

時である。

戦中、ハルピンでの生活

当時のハルピンは植民地の都市だった。九州の田舎から移ってきた者にとっては、榆が舞い石畳を疾走する二輪馬車の風情は、エキゾチックで東洋のパリそのものだった。カルチャーショックは数々あるが、中でも水洗トイレの轟音には驚いた！それに鼻の高い外人が堂々と昼間歩いている様も不思議だった。九州の学校では外人はスパイだと教えこまれていた。なぜ放置しているのか？学校では優秀な奴が多いのに感心した。長崎弁は大いに珍しがられた。不思議なことに、ハルピン放送局での詩の朗読の5人に選ばれたのには緊張した。恐らく先生が長崎弁をなおすための機会を与えてくれたと推測する。詩は「敵機はついに満州を襲った」、トップバッターはM君、二番手が私、次が隣に住むS君。ベテランの男性アナウンサーから2か月間徹底的に訓練を受け仕込まれ、無事放送を終えた。ご褒美に模型飛行機のセットをいただき大喜びした。

母は中央銀行に職を得、一緒に靖国

街の社宅に住んだ。社員社宅は2階建て、二間長屋でオール電化、煮炊きは電気コンロ、よくニクロム線が焼き切れた。風呂はなく、暖房は石炭だった。当時としては珍しかった。支店長宅はそれは豪華、大広間の食堂の周辺にはガラスの食器がずらりと並んでいた。一人娘の部屋は床暖房だった。

45年8月に入ると、周りが慌ただしくなった。総動員で部長以下数名の職員が軍刀を手に出征していった。9日になると、ソ連の落下傘部隊がハルピン飛行場に降下するとのうわさが流れ、近所だったので防空壕の中で震え、緊張して潜んでいた。夏草のむっとするにおいが今も思い出される。

2. 敗戦そして中国残留（留用）

45年8月15日昼、天皇の詔勅を中央銀行ハルピン支店の独身寮で聞いた。受信状態が悪く、ガーガー音は聞こえなかった。話の内容はほとんどわからなかった。夕方になり日本が負けたらしいと風評が立った。寮内の中国人職員の態度が変わったのと考えあわせ、ただな

らぬことを察知した。翌日、昨日までへこへこしていた中国青年に胸を突かれ、やりかえそうとしたが母に制止された。負けたことを実感した。神国日本が負けた？ 事態が信じられなかったが、助かったという安堵感もあった。副支店長の非常時を想定した食料の備蓄があったので、食べることはできた。数日後には前の道をソ連兵に連行される日本兵の行列が続いた。中には柵の間から、手に札束を握り、食べるものを買ってくれと頼まれた。門番小屋のそばの売店に飛び込み、食べられそうなものを買ひ占め提供した。哀れだった。あの屈強な日本の兵隊さんがこんなことになるのか？ 然り、私も後日似たような経験をした。戦争に負けると、こんな目に合うのだと実感した。敗戦は非情！ 後日義父になる三井氏は、混乱の中、病身の妻を亡くした。4人の子どもがいたが、末娘は未熟児だった。親友の苦境を見かねた伯父は、母に面倒を見てやるよう懇願した。

日本帰国が始まった8月には沙曼屯の旧満鉄社宅に住んでいた。帰国のた

め身辺を整理し、それぞれリュック一つにまとめた出発当日の朝。当局の幹部が現れ、三井氏に帰国しないで残ってほしいといと要請、説得されたそうである。曰く、中国は戦後鉄道復興のため技術者が必要だ。貴君の部下の技術者を説得中だが、貴君が残るのなら残ってもよいと言っている。よってぜひ貴君に残ってもらいたい。三井氏は元ハルピン工務区長、敗戦時は満鉄青年学校の教頭で、多くの部下、教え子を抱えていた。部下の中には、足を切断した母を抱え帰るに帰れないMさんもいた。進退窮まり留用を受託したとのこと（自分の未熟児のこともあったかもしれない）。結果母は残らざる得ない羽目になり、私も母一人を残すことができず、妹2人を伯父に託し残留することにした。一方、小荒井八十六さんは東北鉄路管理総局長陳雲（将軍）から留用命令書を受け取った。沙曼屯（満鉄社宅）の区長（日本人）からも通達命令により留用者に決定された通知書を渡された。小荒井さんも5人の子どもを抱える身であった。

辛かったのは、ハルピン駅の倉庫掃除の使役に青年留用者（機関車運転手とかま焚き）と一緒に駆り出された時。駅のホームにたむろする帰国日本人、ホーム横のトイレはこちらからは丸見え、大事なものを投げ捨てる人もいた。貨車に鈴なりに詰め込まれ南下していった。悔し涙を流し、身の不運を恨んだ。それから、「残留日誌」に恨み・辛みをぶつけ、鬱憤晴らしをするようになった。留用後の任地は林口（鉄路交通の要衝）。職員の好意で中学補習の寺小屋が開かれた。教師は日技師（北海道大学、英語・物理）、蓬田技師（旧制工業専門学校、数学）、N教師（国語）である。生徒は橋村以下4人。ハーモニカも小荒井さんに教えてもらった。マツチ箱ラベル収集家から朝鮮学校に入ることを勧められたが、その気にはなれず、また義父に経済負担をかけられる身ではなかった。逆に、マツチ箱収集を自慢する人物を軽蔑した。時間を持て余し、昼間屋根に干した布団に寝そべって、文学全集・探偵小説などを讀んだ。自習する気は、まだ起こらなかったが、

数学・物理に興味を持った。

次の任地は牡丹江。かつて著名な軍都で、敗戦後ソ連軍との戦跡が残っており、宿舎など周りの日本軍官舎の窓枠は全てなくなっていた。忠霊塔そばの山下將軍の官舎の応接間には棺桶が置いてあり、洗面所とおぼしきところのジュラルミンが残っていたのには感心した。要塞だった人工山は陥没しており、入り口は立派に舗装されていたが、数メートル先は陥没しており、怖くて入れなかった。山頂とおぼしきところの鈴蘭の花が印象に残った。ここでも職員有志が夜学を開いてくれた。教師はその道の専門家、最も興味があったのは機関車。昼間は機関車に乗せてもらい、お礼に清掃（機関車磨き）を手伝った。程なく政治学習が始まり夜学は自然消滅した。郊外に駐屯していた航空隊（林部隊）と野球の試合など交流が始まった。腕っ節の太い屈強な雄姿を見て憧れた。

第四軍靴廠

暇を持て余し、紡績工場（旧中学校跡、大連より機械を搬送）で働いた。長旅の錆を煉瓦で擦り落とす作業から

始まり、製糸機のメンテナンスを担当した。初めて給料をもらい、時間中にトイレに行ってもいいのかと訝しく思った。

次に、第四軍靴廠に入った。八路軍の兵隊さんが履く布靴を縫う麻縄を作った。靴底を縫う太めの麻縄と、周辺を縫う細い麻縄と2種類あった。機械を回転させて縋っていくのだが、足踏み速度と、撚りの強さが合わないので機械を改造することにした。日曜日家に帰った時、木の板から大きい丸いプリー（滑車）を糸鋸で切り出し、溝は焼いた火箸を当てて掘った。小径の金属製プリーと交換したところ、綺麗な撚りになり、生産量が2倍になった。請負制だったので給与も2倍になりホクホク、苦勞が報われた。おまけに日本人で初めて労働模範に選ばれ、8人テーブルの宴席に呼ばれた。15皿以上、出たように思うが初めにがつがつ食べ、後半のご馳走を食べ残したのが悔しかった。中華料理の食べ方のマナーを学んだ。

ある日突然、政治幹事から帰国の話を告げられた。残留日本人全員が対象だという。即、帰宅し母に事情を話し、

一足先に帰国することを懇願、水杯を交わして別れ牡丹江を発った。T君（少年隊、天水会）は途中、ハルピンで降り家族に合流した。新京（長春）に一泊。驚いたことに街路樹の樹皮が背の高さまでぎ取られていた。聞くところでは、籠城中に食糧として食べたそうである。チャーズのご苦勞が偲ばれた。終着、奉天（瀋陽）の駅前広場は広く、高い記念塔の上にソ連の戦車が乗っかっていたのが記憶に残る。街中で散髪をしたら、饅で整髪してくれたのには吃驚した（饅は女性のものとして理解していた）。数日後、全員会場に集められ、趙安博主任（東北人民政府外事局日僑管理委員会）の講話があった。曰く「都合で帰国できなくなった」、啞然とした！

補足説明があったが聞く耳はなかった。最後に、「それぞれ、身の振り方を考えるように」と、男子青年には「米の飯が食べられる」鶴崗炭鉱の紹介、提案があった。今更おめおめと牡丹江の母の下へは戻れない。一考の上、鶴崗炭鉱行きを志願した。最大の魅力は「米の飯が食べられる」ことにあった。先

輩の少年隊M隊長・指導員に危険性を理由に、翻意を促されたが、好意を謝し、自身の立場を説明し遠慮した。

鶴岡炭鉱

勇躍、鶴岡炭鉱に旅立った。青年隊の大部分の人が同行した。特に内河季司先輩は心強く、鶴岡炭鉱でも東山に配属され、隣同士に寝た。勤務は3組昼夜交代、私は旧陸軍下士官S氏が組長の15人メンバーの一員に、内河先輩は開拓団出身A氏の組に配属になった。入坑3日目、新人教育の作業中に青天霹靂の事故に遭った。17歳の時、旧坑道内で大きな石を、二人で抱えて移動中、突如相手が手を離してしまった。全荷重が私にかかり、耐えかねて石を落としたが、咄嗟に引っ込めた左手に異常を感じた。手袋をとると、人差し指の爪がなく、骨が露出していた。不思議なことに痛みはあまり感じない。訓練リーダーの元上等兵が、タオルを裂き止血。左腕を頭上に挙げたまま、車で興山にある病院に運ばれた。坑道にはガスがあるので放置すると傷口から腐るからと、すぐ手術が始まった。医師

は元軍医と聞いた。看護婦は普通のお嬢さん。第一関節から先を切り落とすべく、鋸でこしこし切る音が聞こえたが、痛みはあまり感じない。麻酔を打たれた記憶がない。人間は極端に大きな衝撃を受けると、あの敏感な指先の痛みを脳が感じなくなるようだ。二人の看護婦が「可哀そうに…」と泣いていた。様子は、顔にかぶせられたハンカチの間からよく見えた。この時、思ったのは「パートナーは選べ」である。一声発してくれば、怪我はしなくて済んだのに…。

1か月後、職場に復帰した。人の嫌がる発破係を買って出た。鶴岡炭鉱は斜坑で、下から順番に発破の導火線に火をつけていき、急いでもとに戻る。もたもたしていると、最初の発破が爆発する危険な作業である。実際、事故に遭った人がいて、全身に石炭の破片が刺さっていた。顔はもちろん痘痕の様、眼も見えない。よく庭でハーモニカを吹いていたが、悲しいメロディー（故郷）が耳元に残った。炭鉱夫は第一級の労働者で、尊敬され給与も高かった。

手を怪我した情報は母に漏れた。忽々、

母は一人で250km余の鉄道に乗り迎えにきた。中国語は全くわからないのに、よくきたと思う。嬉しかった。別れは辛く、駅まで送ることができず、近くの丘の上から見送った。涙が頬を伝って続々流れた。これを見られたくなかったので、改札口まで見送れなかったのだ。親不孝を詫びた。数日後、幹部に呼び出され牡丹江に帰るよう指示された。母は見舞いではなく、貰い下げに來たのだった。鶴岡炭鉱、最大の収穫は「太陽の下でなら何でもできる」で、人生の指針と自信を得た。

南下命令、新任地天水

牡丹江に帰って間もなく、当局から南下せよとの命令があった。不思議なことに鉄道関係者だけ、携帯物の制限がなく、重病人も一緒だった。牡丹江からハルビン、新京（長春）を経て南下し、天津に到着した。天津は港町だ。日本に帰れるかもしれないと帰国運動が始まったが、夢破れ新任地は甘肅省の天水と告げられた。天津から3日間、荒野を走る列車に揺られ西安に到着。夜眼にも城壁の厚さに圧倒された。翌

朝、西安を発ち宝鶏に到着。この先は試験線とのことで、貨車に乗り換え、さらに西行した。途中、脱線し両側が崖、九死に一生の決死行だったが、天水に到着。目的は天水から蘭州まで354kmの鉄路建設だった。待遇は各段によくなり、私も5年ぶりに復学できた。嬉しかった。天水鉄路子弟中学校は、鉄路職員の子どもが通う学校だったので、義父の姓の三井武司と名乗った。中国語は全くわからないので、初級中学2年に編入し、猛勉強して半年後高級中学（高校）に飛び級した。全寮制で中国の学生と一緒に寝起きしたので中国語は格段に進歩した。一緒に入校した日本人は20名、高校生は3人だった。校長の配慮か、生徒会の文芸幹事、そして学習幹事に任じられた。同級の林君（絵）と私（字）の壁新聞は好評であった。めきめき語彙が増え、

字形も綺麗になった。この私を見て「日本人とはこんなものか」と評されるのを意識し緊張の連続であった。写真の険しい顔立ちを見てほしい。理数系はもちろん、歴史や政治、国語も合格点をもらった。作文は筆で書いた。

帰国

53年春、蘭州で冬休みを堪能していたところ、突然帰国の話が舞い込んだ。当局のアドバイス：①政治に関する書籍、②集合写真、③自筆のノートは、日本で差しさわりのあるかもしれないので、持ち帰らないほうがよい。皆にも通訳し話した。数学教師でクラス担任の呉老師は、記念に数学のハンドブックを下さった。王書荊老師との別れは辛かった。涙ながらの言葉「日本に帰っても、中日友好に尽くすのだよ」は心に沁みた。蘭州を発ち、天水駅で盛大な歓送を受けた。

上海の宿は、ガーデンブリッジそばの学校寮風2階建ての建物だった。憧れの上海、第一百貨店でバックグラウンドの音楽を聴きながら、エスカレーターで上階に行くと大きな綺麗な壺を

売っていた。ハイカラだなと思った。ハーフコートの皮ジャンをセミオーダーで50万円、革靴25万円を記念に買った。

3. ああ、わが祖国

3月21日、上海を発った。通関はフリーパス。残留日誌を焼き捨てたのが悔やまれる。裏日本の松江らしきところの松並木を眺めた時、やっと日本に帰れたとの実感が湧いた。23日夕刻、舞鶴港に着いた。24日、はしけで浮き桟橋に上陸、祖国の土を踏んだ。宿舎は兵舎風の広い建物だった。26日夜、祖父が昇り旗を立て、老軀を押し、佐賀から迎えにきた。心意気に感動した。

伯父を頼り、義父ともども長崎市に帰った。妹二人と再会を果たし、高校2年生からやり直した。英語は苦しんだ。模範生で卒業できたが、国立大学の壁は高く、見事に振り落とされた。

また義父はアカ呼ばわりされ就職口はなかった。苦慮の末、進路を求め上京した。遠縁のついでで中央大学図書館に臨時職員の職を得、ご配慮で工学部図書館に移り、翌年同敷地内の工学部電



天水鉄中時代の私と母



唯一持ち帰れた自筆の赤い手帳

気工学科を受験し進学した。昼間学校、夜図書館勤務を4年間続け、12時前に寝たことはなかった。

就職はシチズン時計(株)に挑戦した。世間相場1万3600円/月の時代、1万9200円/月が最大の魅力。機械腕時計から電子腕時計の研究開発で世界初名乗りを目指し、寝食を忘れ働いたが僅差で銀メダルに終わった。世界中の人々に水晶腕時計を使っていた感激している。その後、(株)アマダでレーザー加工機の基礎研究に携わることで技術者冥利に尽きる。また1995年から2年間、清華大学精儀系

センサ研究室にJODC(海外貿易交流協会、通産省補助)の専門家として派遣され研究・開発のお手伝いをした。

4. 天水会

1954年5月25日、創立第1回集会を東京の新宿御苑で盛大に開催した。晴天に恵まれ、参加者86名、世話人は北川信一、上原善一郎、南谷幸典であった。天水会は会員の親睦を趣旨とする

もので、会則もなければ、会費もない。有志のキャンパにより運営されるユニークな団体である。中国での苦節を経て、懐かしの祖国に帰国したのに世間の目は厳しかった。「アカ」呼ばわりされ就職はままならず、生活の基盤を築くのは容易ではなかった。周りに気配りをした船出であった。第3回集会を1958年5月25日に、新宿御苑で開催した。参加者は96名と、その輪を広げた。そして8月10日には『天水会報』第1号を創刊した。編集者は南谷幸典、ガリ版刷りB5版4ページ、後に伊藤礼子にバトンタッチした。今は木村達也顧問が担当している。編集方針は

「会員の状況・情報交換に重きを置き、広告とはとらない」である。私のところには『天水会報』は創刊から現在まで全てそろっている。会報への情熱は、二世に引き継がれ発行を今も継続している。また、『天水会報』は「天水デジタルアーカイブプロジェクト」(木村達也顧問)により、電子化され『天水会小史』(絶版)ともどもCDに収録されている。

天水中日友好桜花園

1999年10月、天水中日友好桜花園を開園した。天水会の会員は天蘭線建設に協力し、完成させたことに誇りを持っている。また、天水市民との友情は深まり、天水は第二の故郷になった。ぜひ実績を残したいと念願し会員は立ち上がった。記念碑の碑文は推敲に推敲を重ねた南谷老の力作である。天蘭線完成の事績は、日中友好交流のはしりでありシンボルだと自負している。その後日中の交流は、工事に携わった同僚、同志のみならず、当時学生であった二世に引き継がれ、天水会70年の歴史を刻んでいる。

南谷老は2003年8月15日、亡くなられた。享年94歳。老の足跡については、拙文「南谷老を悼む」新ランドブリッジを天国に伸ばす」(会報2003年)を参照。天水に対する思い入れは人一倍強く、天水中日友好桜花園の完成式には、老軀を押して参加された。その熱意、面目躍如であった。「新中国建国間もない時期に日本人技術者たちが中国の技術者・工人に協力して天蘭線を建設した事績を中国の人々にも知ってもらいたい」が口癖だった。南谷老の魂は、今も第二の故郷天水にある。その想いは達せられ、天水中日友好桜花園は、天水市民の憩いの場になり、記念碑の前では太極拳が舞われ、東屋は談笑の場になっている。そして、市政府の指針「天水を花の街に」で、藉河河畔は数キロにわたる桜並木になっている。これを受け、天水会は2つの活動プロジェクトを立ち上げ、最終の締めを計画している。「天水鉄路博物館展示プロジェクト」と「天水さくら(桜花)プロジェクト」はぜひ完成させたい。皆様のご支援、ご鞭撻をお願いしたい。

5. まとめ

(1) 中国は育ての親、中国は第二の故郷。最大の成果：「太陽の下でなら何でもできる」の人生の指針と自信を得た。歴史は「炭鉱のカナリヤ」という意味が体験を通して理解できた。

(2) 新中国の建設を支援する機会を得た。国共内戦、人民解放戦争を後方で支援した。天蘭線建設に同行し、念願の学生生活ができた。

(3) 日中草の根活動は生涯を通しての生き甲斐になった。天水会の70年にわたる活動、同学たちとの親交が続いて



天水中日友好桜花園

いる。成し得たことはわずかもかもしれないが、これからも活動を継続したい。

(4) 水晶時計の研究・開発・販売、またレーザー加工機の基礎研究に立ち会えた。

技術者冥利に尽きる。

(2023年3月30日・公開講演会)

筆者略歴(はしむら たけし)

長崎県対馬出身。10歳で渡満、1953年帰国。中央大学工学部電気工学科を卒業後、シチズン時計(株)に入社。水晶時計、事務機器、健康機器の研究・開発を歴任。その後、(株)アマダに入社。レーザー加工機およびロボットの研究・開発、中国進出計画に参加。1995～97年、JODC専門家(通産省補助)、清華大学精密系でセンサ技術指導。国内では特許流通アソシエイト(公益財団法人発明協会)、地域産業振興を促進。2000年から10年間、北京市八達鎮で防風固沙の植林活動。1998年から科学技術者フォーラム理事。現在、天水会会長、龍騰グループ代表。